調査対象動植物の見分け方

動物

01 ザリガニ

体長5cmくらいの小形のエビで、アメリカザリガニのように赤くなることはない。頭部の甲らは丸味があり、滑らかで、ハサミはあまり大きくならない。谷川や湧水池など水のきれいな所にすむ。北海道、青森県、秋田県、岩手県に限って分布する日本固有種。
北海道の摩周湖や阿寒湖などにすむウチダザリガニは、昭和4年にアメリカからスチールヘッド(ニジマスの一種)のえさにする目的で移入され、定着したもので、ザリガニと区別される。

ザリガニ

02 アメリカザリガニ

体長10cmくらい。大形でハサミが非常に大きい。頭部の甲らには、とがった粒がたくさんある。一般に「ざりがに」、「えびがに」と呼ばれる。池や沼、川、水田などにすむ。本州、四国、九州に広く分布するアメリカ原産の帰化動物。このほか似たものに帰化動物のタンカイザリガニ（滋賀県の淡海池）とウチダザリガニ（北海道の一部と石川県の志賀町）がいるので注意を要する。

ざりがにの釣られて泥を滴らす　　村沢夏風

アメリカザリガニ

帰化動物

帰化動物とは、本来日本に生息していなかった動物で、人間によって意識的または無意識のうちに日本に持ち込まれ、野生の状態で繁殖するようになったものをいう。
アメリカザリガニは、ウシガエル（食用蛙ともいわれ、大正8年ごろアメリカから養殖するために輸入された）のえさにする目的で、昭和5年に神奈川県に輸入された。神奈川の養殖池から逃げ出したアメリカザリガニはしだいに分布を広げ、今では北海道を除く全国各地で見られるようになった。
帰化動物には、在来の種類を駆逐したり、農作物に害を与えるものが多い。アメリカザリガニは水田のあぜに穴をあけたり、イネの苗を食い荒らすなどして嫌われている。

03 ヤシガニ

ヤドカリの仲間で、成長すると甲長12cm、体重1.3kgにもなる。子供のときは、ヤドカリのように巻き貝の中に入る。成長したものは貝殻に入ることはなく、腹部も短く、背中も硬くなり、ヤドカリとは形が異なる。アダンの生えている海岸付近にすみ、アダンなどの果実、木の髄(ずい)、腐った肉などを食べる。陸生で主として夜間に行動する。ヤシの木に登ってその実を食べることからヤシガニの名がある。与論島および沖縄に分布。

ヤシガニ

04 サワガニ

甲らの幅は2.5cmくらい。上から見ると甲らは丸味を帯び、表面は滑らか。雄はどちらかのハサミが大きい。産地によって色が異なり、淡灰青色、茶褐色、紫黒色の3基本型がある。沢や渓流に生息する。本州、四国、九州に分布。

a 淡灰青色

b 茶褐色

c 紫黒色

サワガニのいろいろなタイプ

05 ハッチョウトンボ

トンボ類（イトトンボ類を除く）では最小。体長は1.5～2.0cm。雄は全体が美しい鮮紅色で、翅の基部は赤橙色。雌は体が雄より太く、褐色の地に黄色の斑紋がある。5～9月ごろミズゴケなどの生えた明るい湿原などで見られる。幼虫（ヤゴ）は湿地の水の中で育つ。本州、四国、九州に分布。

ハッチョウトンボ（オス）

ハッチョウトンボ（メス）

06 キリギリス／ハネナガキリギリス

頭から翅の先まで3.8～4.8cm。体は太く、触角は細くて長い。後肢は長くて大きい。色は明るい褐色。翅は体に比して小さく、緑色のすじと小さな黒点がある。日の当たる草原に多くすむ。成虫は真夏に出現し、雄はキリキリ―チョンと鳴く。雑食性で、小昆虫ややわらかい植物を食べる。キリギリスは本州、四国、九州に、ハネナガキリギリスは北海道に分布。

ヤブキリ、クダマキダマシ、クビキリバッタ、クサキリなどとは、緑色のすじと黒点があることで区別できる。

キリギリス

明けかかる高窓引くやきりぎりす　　室生犀星

07 タガメ

体長4.8～6.5cm。日本の水生半翅類では最大。体は小判型で扁平。色は褐色をしている。前肢は鎌のような形をしており、水生昆虫や魚を捕えて体液を吸う。後肢は泳ぐためのオールになる。水草のある古いため池などに生息し、年間を通じて見られる。夜間、灯火に飛来することもある。かつては平地で普通に見られたが、現在では数が激減している。本州、四国、九州、沖縄に分布。

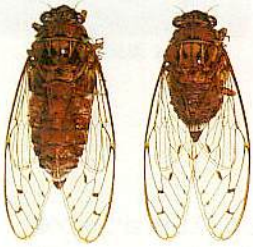
田草取る手の甲走り田亀逃ぐ　　吉田露文

タガメ

08 ヒグラシ

体長は雄が3.3～4.0cm、雌が2.2～2.8cm。翅の先までの長さは4～5cm。雄の体は細長く、腹部は空洞のように見える。雌の腹部は短い。腹部の色は緑色で、黒や茶色の斑紋がある。翅は透明で、やや緑がかっている。6～9月に、平地から山地にかけてのうす暗い林で見られる。明け方や夕方に、「カナカナカナ……」あるいは「ケケケ……」と鳴き、「かなかな」の別名がある。北海道、本州、四国、九州に分布。

ひぐらしのこゑのつまづく午後三時　飯田蛇笏



ヒグラシ（オス・メス）

09 ミンミンゼミ

体長は3.0～3.5cm、翅の先までの長さは5.5～6.5cmの大型のセミ。体は太くて短い。黒と緑の斑紋がある。黒地に緑色斑のあるものから、緑地に黒斑のあるものまでいろいろである。翅は長く、透明。真夏にアブラゼミより少し遅れて出現し、ケヤキやサクラなどの幹にとまって「ミーンミンミン……」と大声で鳴く。北海道、本州、四国、九州に分布。東日本では平地、西日本では山地に見られる。

ミンミンゼミ

生物季節観測

植物の開花や動物の出現などの生物季節の期日を白地図上に記入し、等期日線を引くと生物季節の移動がわかる。このうち、特に花の等期日線を気象の前線になぞらえて花前線という。

気象庁では、全国各地の気象台、測候所など102の観測地点で、植物12種類の開花日や紅葉日、動物11種類の初鳴日や初見日を調べる「生物季節観測」を行っている。つまり、季節の便りを動植物を通して観測しているのである。観測の歴史は古く、明治13年にまでさかのぼるが、途中何度か観測方法は変わっている。最近、都市化で動植物の種類や数が少なくなったことから観測が難しくなり、昭和49年に観測地点を「気象台などの構内またはその付近」から「同一の気候、地勢で観測可能な範囲」にまで拡大している。

【植物季節】 ウメ、ツバキ、タンポポ、ソメイヨシノ、ヤマツツジ、ノダフジ、ヤマハギ、アジサイ、サルスベリ、ススキ、イチョウ、イロハカエデ

【動物季節】 ヒバリ、ウグイス、ツバメ、モンシロチョウ、キアゲハ、トノサマガエル、シオカラトンボ、ホタル、アブラゼミ、ヒグラシ、モズ

10 オオミノガ

雄の成虫(蛾)は翅の長さが1.6～1.9cmで、褐色をしている。幼虫はカキ、ウメ、イチジクなどの葉を食べる。成長すると、体から分泌した糸で枯れ葉や樹皮の細片をつづり合せて紡錘形のみのを作り、その中で蛹になる。この状態から「みのむし」と呼ばれる。羽化した雄は外界に出るが、雌は外に出ることはなく、うじ状の形をしたままみのの中で一生をすごす。本州、四国、九州に分布。
似た種類にチャミノガがあるが、みのの形は円筒状である。

オオミノガ

11 オオムラサキ

翅を広げたときの長さは8～9cmに及ぶ。がんじょうな感じのする蝶で、翅は幅広く厚い。翅の裏面は一面白っぽい黄緑色をしているが、表面は濃褐色で黄色の小紋がたくさんある。雄の翅の基部は美しい紫色で、後翅の下端にはふつう赤い小紋がある。雌には紫色の部分はない。成虫(蝶)は6月から8月にかけて、平地や山麓地帯の雑木林で見られる。幼虫はエノキの葉を食べて育ち、成虫になるとクヌギなどの樹液を吸う。北海道、本州、四国、九州に分布。

オオムラサキ

12 ハンミョウ

体長2cmくらい。触角と肢の長い甲虫。体は金属青色に輝き、赤い斑紋がある。人が近づくと、さっと飛び立って前方の地面に下りたち、人の方を振りかえって見るしぐさをするので、「みち教え」という別名がある。4～10月に見られる。幼虫は固い地面に垂直な穴を堀って生活する。成虫は山間の渓流沿いの砂地や、踏み固められた赤土の斜面、山道などで見られる。肉食性。本州、四国、九州に分布。

斑猫の飛びて馬籠へ坂嶮し　　所山花

ハンミョウ

13 カブトムシ

体長3.0～5.3cm。雄は頭部に、兜の前立のような長い角をもつ。雌には角がなく、大型のコガネムシのようである。体色はチョコレート色であるが、黒っぽいものや赤っぽいものもいる。幼虫は堆肥、朽ち木、おがくずなどの中で育つ。成虫は6、7月ごろ地上に出て、コナラやクヌギなどの樹液を吸って生活する。夜、飛翔する。本州、四国、九州、沖縄に分布。北海道には人為的に持ち込まれたものが生息する。
似た種類のコカブトムシは、体長が2.4cmどまりである。

いづくへか兜虫やり登校す　　中村汀女

カブトムシ

14 ゲンジボタル

雄は体長1.2～1.5cm、雌は1.5～1.8cm。黒い翅をもつ細長い甲虫。前胸部は赤く、その中央に縦の細い黒すじがあり、黒すじの途中が少しふくれている。幼虫時は清流にすむカワニナなどを食べて育つ。成虫も流れのある小川のほとりで5、6月に飛び交う。本州、四国、九州に分布。ヘイケボタルは体が小さく7mm～1cmで、前胸部の黒すじは太く、ゲンジボタルのようにふくらんでいない。飛び交う時期も長く8月ごろまで見られる。清流以外の水田や池沼にも生息する。ヘイケボタルは北海道にも分布。

ゲンジボタル

すっと来てついと流るるほたるかな　舎羅
螢火の今宵の闇の美しき　高浜虚子

ゲンジボタル

ヘイケボタル

15 ヤマメ

全長10～30cm。背びれの後方に小さな脂びれをもつ。体の背側は濃青色で、体の横には小判形をした濃青色の紋(パー・マーク)と多くの黒点がある。山間の渓谷の冷水域に多くすんでいる。イワナと同様に、完全な動物食で水生昆虫などをどん欲に食べる。サクラマスの陸封型で、河川の上流でふ化した稚魚は海へ下らず、一生を淡水域ですごす。本州(神奈川県以北、日本海側全域)と九州に分布するが、最近は養殖されたものが各地に放流されている。

ヤマメ

激つ瀬のしぶきつめたき山女釣　中谷朔風

16 アユ

全長15～20cm。小さな脂びれをもつ。尾びれは二又に分かれる。背側は暗緑色で、腹側が白い。胸びれの上方には黄色の楕円形の斑紋がひとつある。日本を代表する淡水魚の一種。河川で生まれた稚魚は海に下って、沿岸で数ヶ月をすごす。川と海の水温が同じになり始める2、3月ごろ、川への遡上が盛んになる。全国の河川に分布するが、近年は放流も盛んに行われている。

アユ

飛ぶ鮎の底に雲ゆく流かな　鬼貫

アユのなわばり

卵からふ化した稚魚はすぐ海か湖に下り、沿岸部ですごす。大きくなったアユは早春ごろから川にのぼり始める。最初は群れで生活するが、まもなく1m²くらいのなわばりをつくり、その中で石に付着する藻類を食べて生活する。ほかのアユがこのなわばりに侵入すると、なわばりの持ち主はそれを攻撃する。
藻を主食とするため、えさをつけてアユを釣ることは難しい。そこで、このなわばり防衛の習性を利用して「友釣り」という方法が用いられる。

17 オイカワ

全長8～15cm。成魚の雄の尻びれは大きく、長い。繁殖期の雄は美しく、体側は暗紅色で横斑の赤味も強くなり、頭や体、尻びれにはざらざらした粒つぶ(追星)が現われる。関東ではヤマベ、関西ではハエというように地方名が多い。河川の中流域から河口までにすみ、水の汚れにも強く、都市廃水の多い地域でも見られる。水深5～10cmの流れのゆるやかな瀬に好んですむ。本州、四国、九州に分布。

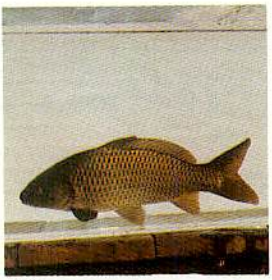
野の朝日いづるや堰にやまべ釣　　水原秋桜子

オイカワ

18 コイ

非常に大きくなり、全長1mに達することもある。体には大きな丸い鱗がならび、唇は厚く、口ひげが4本ある。河川や池沼にすむ。水温、水質に対する適応性が強く、繁殖力も旺盛である。冬期は浅い所になかば冬眠状態で、群れをなしてじっとしている。雑食性。全国に分布。

寒鯉の雲のごとくにしづもれる　　山口青邨



コイ

19 フナ

フナには二つのタイプがある。一つはマブナで、もう一つはヘラブナである。マブナはギンブナとキンブナを総称した名前で、体の色はギンブナが緑褐色、キンブナが黄褐色。ヘラブナに比べ、かなり太った体形をしている。全国に広く分布し、渓流などを除いた河川、池、沼、湖にすむ。ヘラブナは体が平たく灰色がかっており、ゲンゴロウブナの通称がある。琵琶湖が原産で、釣りの対象として各地の川や池沼に放流されている。冬眠していたフナは3、4月に水がぬるむころ、産卵のために小川や水田に大群でのぼってくる。これを乗込鮒という。

乗込みに一揆のさまの川激つ　　河野南畦

マブナ

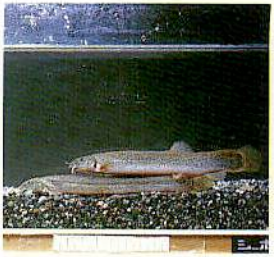
ヘラブナ

水質と生物

川の汚れ具合は、そこにすむ生物によって知ることができる。サワガニやヤマメはきれいな水に、アメリカザリガニやコイ、フナ、ドジョウは汚れた水に、イトミミズやサカマキガイはとても汚れた水にすむ。生物を使った水質判定は水質を総合的にとらえることができるほか、有害物質の蓄積もわかる利点がある。この手法による調査は簡単であるので、各地でボランティアによる「川の汚染地図」づくりが進められている。

20 ドジョウ

体は細長く、背びれと腹びれは体のほぼ中央にある。尾びれは大きく、縁が丸い。10本の口ひげがある。背側は灰褐色で、腹側は淡黄色。水田やそれにつながる小川、泥のある河川や池沼にすむ。産卵期は5～7月ごろ。雑食性で、小動物を泥といっしょに吸いこんで食べる。冬には泥の中にもぐり、越冬する。全国に分布。
水の澄んだ、砂質の河川にすむシマドジョウは体側にしま模様があることで区別できる。



ドジョウ

21 メダカ

全長3cmくらい。背びれは尾びれに近い位置にある。腹びれは腹側の中央にあり、尻びれは長く大きい。体は黄褐色で、背中に黒い線がある。水田の水路や川に生息する。ふつう群れで生活する。本州、四国、九州、沖縄に広く分布していたが、現在では少なくなってきている。地方名は3000にも及ぶ。例えば、アブラコ、ウキス、ウルメッコ、コメンジャコ、ザッコ、タカメ、ミミンジャコ、メンザ、メンパチなどの呼び名がある。
カダヤシがこれに似ているので注意が必要。

メダカ

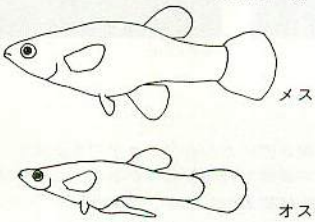
22 カダヤシ

雄は全長3cm、雌は5cmに達する。体形はメダカに似るが、各ひれはすべて丸味がある。別名、タップミノー。メダカと同じような環境に生息するが、高温や汚水に対する耐久性がメダカよりも強い。卵胎性。アメリカ原産の帰化動物。大正2年ごろ、マラリア病を媒介する蚊を駆除する目的で輸入された。現在では関東平野を中心として全国的に分布を広げており、在来のメダカを駆逐しつつある。

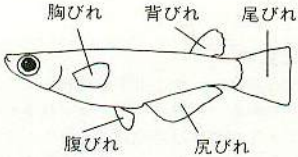
カダヤシ

見分け方

カダヤシの各ひれ(特に尾びれ)は丸いが、メダカは丸くない。メダカは眼が大きく、口は顔の上の方にある。



カダヤシ



メダカ

23 イモリ／シリケンイモリ

水中や水辺にいてトカゲに似る。全長8～13cm。皮膚の表面はザラザラし、尾は縦に平たくひれ状。指は先が細い。背中は黒っぽく、腹は赤またはオレンジ色で不規則な黒い斑がある。本州、四国、九州、沖縄に分布。奄美と沖縄にはシリケンイモリが、それ以外の地域にはイモリが生息する。

サンショウウオは体形が似るが、腹は赤くない。ヤモリは人家の壁や天井にはりついていて泳ぐことはない。奄美と沖縄のイボイモリは肋骨が出っぱり、体が平たいことで区別できる。

イモリ

24 ヒキガエル

皮膚に大小の丸いイボがある。体長は7～17cm。鼓膜(耳)の上の左右に土手状の大きなふくらみ(耳腺)がある。産卵期以外はあまり水に入らず、主に陸上でくらす。昼間は草むらや物陰にひそみ、夜間に昆虫などを捕食する。卵はひも状の長い寒天質に包まれている。全国に分布。ガマガエルともいう。

ツチガエルもイボがあるが、体長が6cm以下と小さく、耳腺が長い。イボは楕円状で、肢が長いことで区別できる。

ヒキガエル

25 ウシガエル

体長10cm以上で、大きいものは20cmにもなる。食用蛙として知られている。鼓膜(耳)がとびぬけて大きい。体は滑らかで、うね状の皮膚の盛り上がりがない。指は先がふくらんでいない。背中の色は緑がかった褐色で、黒っぽい不規則な模様がある。「ボーム・ボーム」と聞こえる低くて大きな声でウシのように鳴くのでウシガエルという。オタマジャクシも大きく長さ10cm以上になる。アメリカから移入されたが、今では全国に分布する。

ウシガエル

26 カジカガエル

体長3～7cmほどの平たいカエル。皮膚は滑らかで、わき腹の背中側にひだがない。指の先には大きな吸盤がある。前肢のみずかきは目立たない。後肢は長くて、よくはねる。頭は細く、平たい。色は灰褐色で黄色や緑色がかっていることもあり、不規則な模様がある。主に山地の水のきれいな渓流にすみ、澄んだ高い声で鳴く。鹿に似て、「フィーフィフィフィ、フィロロロロ……」と笛の音のような声で鳴く。本州、四国、九州に分布。

河鹿鳴いて石ころ多き小川かな　　正岡子規

カジカガエル

27 アオダイショウ

全長1～2mになる大きなヘビで、木にも登り、人家付近にすみついてネズミなどを食べる。親ヘビは、全身が褐色を帯びた緑色で、はっきりしない4本の暗い縦じまがある。虹彩は褐色でひとみが丸い。子ヘビは親とまったく色が違っていて、灰褐色の地にはしご状に見えるぶち模様がある。また、頭が角ばっていて、マムシに間違えられることがある。北海道、本州、四国、九州に分布。

シマヘビは色がよく似ているが、これは虹彩が赤っぽく、明るい所ではひとみが猫のように縦長になる。

アオダイショウ

28 ドバト

全長33.5cm。色は灰色のものが多いが、茶、黒、白色のものもいる。神社や公園に群れで見られるいわゆる「ハト」のことである。都市を中心に全国に分布する。「ククゥ、ククゥ」と鳴く。

ドバトは、ユーラシア大陸に分布するカワラバトの改良品種である伝書バトや愛がん用ハトが野性化したものであり、本来の野鳥とはいえない。今では増え、建築物、農作物に被害を与えることもある。

ドバト

29 キジバト

全長33cm。ドバトより少し小さい。背中は灰褐色で、頭から胸、腹にかけては淡い褐色をしている。首の横には灰青色のしま模様がある。里山や村落の林にすむ。近年、市街地の公園や庭でもよく見かける。主に地上を歩きながらえさをとり、給餌台にもよく来る。「デデッポッポー」とのどかに鳴く。全国に分布するが、北海道や積雪地のものは冬期に南へ移動する。「山鳩」の別名がある。

キジバト

30 カッコウ

全長35cm。色は灰色のものと茶色のものがいる。同じ仲間のホトトギスやツツドリは形や色がよく似ており、姿で区別することは難しいので「カッコー、カッコー」という鳴き声で見分けるのが一番である。北日本では平地に、南日本では山地に多い。草原や明るい林にすむ。夏鳥として渡来し、春から夏にかけて九州以北の各地で見られる。

閑古鳥二羽と聞きしも一羽かな　　太　祇

カッコウ

托卵（たくらん）

カッコウの仲間は自分で巣をつくらず、ほかの鳥の巣に卵を産みひなを育てさせる習性をもつ。これを托卵という。托卵性の鳥のひなはふ化が早く、育て親の卵を背中で押して巣外へ落とし、自分だけが、育て親からえさをもらい成長する。カッコウはオオヨシキリやホオジロなどに、ホトトギスはウグイスなどに托卵する。

31 カワセミ

全長17cm。くちばしは長くとがり、大きな頭と短い尾をしているのが特徴。「ツィー」と鋭く鳴き、低空を一直線に飛ぶが、飛ぶと背中のコバルト色が目立つ。体を垂直にして水辺の枝や岩にじっととまって水中の魚をねらい、急降下してとる。川沿いの崖などに穴をあけて巣をつくる。群れになることはない。北海道では夏鳥、本州以南では留鳥として、湖沼、川などにすむ。魚の減少や土手のコンクリート化により生息数が減ってきたといわれる。

川せみのねらひ誤る濁(にごり)かな　　正岡子規

カワセミ

32 ヒバリ

全長17cm。スズメより少し大きく、黄色味をおびた褐色の鳥。頭の羽毛をとさかのように立てることがある。平地から山地にかけての草原、河原、畑などにすむ。足を交互に出して歩き、はね歩きはしない。空の一点にとどまるようにして飛びながら「ピーチュルピーチュル」と複雑な声で長時間さえずることがある。北海道、本州、四国、九州に分布し、数も多い。北海道や雪の多い地方のものは、冬期、暖かい地方に移動する。

雲雀より空にやすらふ峠かな　　芭蕉

ヒバリ

33 ツバメ

全長17cm。頭から尾まで体の上面は光沢のある黒色。額と喉(のど)は赤く、胸と腹は白色。尾羽が深く切れこんでいるのが特徴。春から夏にかけ、人家近くで多く見られ、軒下などに椀形の巣をつくる。繁殖期が終わると、大群で河口のヨシ原などをねぐらとする。九州以北の各地に渡来する夏鳥であるが、少数は本州中部以南の暖地で越冬する。
似た種類のイワツバメは腰が白く、コシアカツバメは腰がオレンジ色である。どちらも、喉は赤くない。

今来たと顔を並べるつばめかな　　一茶

ツバメ

コシアカツバメ

イワツバメ

鳥の季節的移動

渡り鳥というとツバメに代表されるが、多くの鳥は季節的な移動をする。ツバメのように春に南から渡来して繁殖し、秋には南へ去る鳥を夏鳥、ハクチョウ類のように北方で繁殖し、越冬のために渡来する鳥を冬鳥、シギ類のように渡りの途中に立ち寄る鳥を旅鳥という。スズメやキジバトなどその地域で一年中見ることのできる鳥は留鳥という。また、繁殖期は山地に生息し、冬は平地におりてくるウグイスのように、国内を季節的に移動する鳥を漂鳥ということもある。

34 オオヨシキリ

全長18.5cm。スズメより大きく、全身うす茶色で目立たない。海岸、川岸、湖沼などのヨシ原にすむ。春から夏の繁殖期には、ヨシの上にとまって「ギョ、ギョ、ギョギョシ、ギョギョシ、ケチ、ケチ」と大きな声でさえずる。夜も鳴く。北海道、本州、四国、九州に広く分布する夏鳥。
同じ仲間のコヨシキリはスズメより小さく、眼の上に眉のような黒と白の線がある。
俳句ではオオヨシキリを「行行子」とも詠む。

よしきりの現はれて啼く草嵐　　臼田亜浪

オオヨシキリ

35 スズメ

全長14.5cm。頭が黒っぽい茶色、背中が茶色で黒い縦すじがある。顔は白く、喉と頬に黒斑がある。村落や都市など人間が住むところにいて、山岳地など人のいない地域では見られない。屋根のすきまや戸袋などに巣をつくる。秋冬には、群れになってヨシ原や竹林などをねぐらとする。
全国に広く分布する。
よく似たニュウナイスズメは、山地で繁殖し、頬に黒斑がない。

雀子やあかり障子の笹の影　　其角

スズメ

36 ムクドリ

全長24cm。全身灰黒色または褐色。くちばしと脚は橙色。尾は短くて、ずんぐりに見える。飛び方は直線的で、飛翔中は翼が三角形に見え、腰の白色部が目立つ。足を交互に出して歩き、はね歩きはしない。村落や市街地で見られ、樹洞や戸袋などに巣をつくる。繁殖期以外は群れで生活し、秋から冬にかけては、数千羽をこえる大群になることがある。「キュルルキュルル」とか「リャーリャー」とやかましく鳴き合う。全国に分布。ただし九州ではあまり多くない。

椋鳥の無数の声の渦となる　　阿片瓢郎

ムクドリ

37 オナガ

全長37cm。名前のとおり尾は長い。背と腹は褐色を帯びた灰色。頭は黒く、翼と尾が水色。尾羽の先端は白い。人家近くの雑木林や松林などにすみ、市街地の公園や庭の給餌台にも姿をみせる。ゆるやかな波状に飛ぶ。繁殖期以外は数十羽の群れでいることが多い。「グェーイ、グェーイ、ギュイギュイギュイ」と大声で鳴く。本州の中部地方以北に留鳥として分布するが、分布の中心は関東地方である。巣にネコなどが近づくと、ほかの親鳥も集まってきて鳴きわめき、威嚇する。

オナガ

38 オオコウモリ類

日本では、小笠原諸島にオガサワラオオコウモリが、九州南部から沖縄にかけてはクビワオオコウモリが分布する。オオコウモリ類はふつうのコウモリより大きく、カラスくらいの大きさである。眼は大きく、くちばしは突き出ている。全身褐色の毛に覆われているが、クビワオオコウモリには淡色の頸輪がある。ふつう、夕方から夜にかけて活動し、主に果実類や花蜜を食べる。

オオコウモリ類

39 ノウサギ／ユキウサギ

ノウサギは本州、四国、九州に、ユキウサギは北海道に分布する。どちらも夏毛では全身褐色であるが、ユキウサギと積雪地のノウサギは冬に毛が白くなる。ほかの地域のノウサギは冬でも褐色のままである。両種とも夜行性で、草の葉や樹木の芽、樹皮などを食べる。
野生化したカイウサギには、体色のよく似た褐色のものもいるが、カイウサギは耳がやや長く、耳の先が黒くない。

雪原の一兎雪原の先に出づ　　高田貴霜

ノウサギ

40 ニホンリス／エゾリス

ニホンリスは本州、四国に、エゾリスは北海道に分布する。どちらも腹部は白く、夏毛は赤褐色から褐色で、冬毛は灰色に近くなる。冬には耳の先にふさ毛が生える。どちらも早朝や夕方に林の中でよく活動する。また、樹上に小枝を組み合わせたボール状の巣をつくる。木の果実や種子、芽などを主食とするが、昆虫などの動物も食べる。
似たものに各地で野生化している帰化動物のタイワンリスがあるが、これは全身が黄褐色から黒褐色で、腹部は白くない。冬毛も色は変わらず、耳にはふさ毛がない。肢は短めで、体つきはがっしりしている。北海道に分布するシマリスはエゾリスよりはるかに小形で、背中に5本の黒い縦じまがあり、昼間に活動し、主に地上で生活する。

ニホンリス

タイワンリス

シマリス